

第2回 イギリス

“BBCは創造的な実力社会に参加すべきだ”

～イギリス番組制作プロダクション社長 キャット・ルイス氏に聞く～

メディア研究部 中村美子



キャット・ルイス (Cat Lewis)氏は、イングランド北西部の大都市マンチェスターを本拠地とした番組制作会社 Nine Lives Media を2007年に設立。経営者であると同時に、エグゼクティブ・プロデューサーでもある。2006年には“Indie Club”を組織し、イングランド北部の番組制作者の情報交換と業界活性化を目的とするフォーラムを運営している。2013年からは、番組制作者連盟のPact (Producers Association of Cinema & Television)の副会長を務めている。

目的とするフォーラムを運営している。2013年からは、番組制作者連盟のPact (Producers Association of Cinema & Television)の副会長を務めている。

はじめに

「公共放送インタビュー」と言えば、公共放送に働く職員や幹部、たとえば1回目のフランステレビジョンのフリムラン社長のような人物の登場を期待するところであるが、今回は地方の民間の番組制作会社の社長にスポットライトを当てた。

イギリスでは、公共放送BBCの今後の10年間の存続とあり方を決める特許状更新の議論がいよいよ本格化し始めている。この特許状更新に影響を与える変化の1つが、今回イン

タビューを行ったような、放送事業者に属さない“独立系”のテレビ番組制作会社や個人のプロデューサーの成長とテレビ産業のイギリス経済への貢献である。若干のデータを参照すると、2012年までの過去8年間でこうした制作会社の売り上げは1.7倍に増加し、2012年の年間事業収入は総額27億8,800万ポンド(約5,200億円)に上る。2008年からのグローバルな不況を考慮すると堅調な伸びをみせている。そして、番組制作業界の成長を大きく支えているのがBBCである。BBCは全国に制作拠点を設ける一方、2007年からニュースを除く全国放送のテレビ番組の50%をロンドン以外の地域で制作することを目標とし、外部への制作委託を積極的に進める政策をとってきた。また、外部委託制作の法定クォータ25%に加え、さらに25%の番組をBBCの内部と外部との競争入札制にするというWoCC (Windows of Creative Competition)を導入した。言い換えれば、BBC内部の制作者に対する制作保障は50%にとどめ、独立プロとの関係をロンドンおよび地域拠点で深めてきた。このように、現行特許状の期間中の大きな変化は、独立系のプロダクションの興隆と、BBCの制作慣行の変化であり、こうした変化を抜きに、BBCの将来を予測することは不可能だろう。

BBCは、ロンドンのほかにスコットランドのグラスゴー、北アイルランドのベルファスト、ウェールズに隣接するブリストルなど、全国7つの拠点で全国向けのテレビ番組を制作している。中でもロンドンに次ぐ大規模拠点局が、今回訪問したイングランドの北部グレーター・マンチェスターのサルフォード市に建設されたBBC Northである。BBC Northは、マンチェスター支局を吸収し、全国向けの子ども向け、スポーツ、教育の番組制作部局、そしてラジオのRadio 5 Liveをロンドンから移したほか、朝のスタジオ報道番組“BBC Breakfast”もここで制作されるようになった。また、BBC Northは老舗商業テレビで最大のITV plcの制作スタジオITV Studiosとともに“MediaCityUK”を形成し、マンチェスターの地域経済に貢献している。



BBC NorthとITV Studiosのビル群。2015年4月には、総選挙前の党首討論会がITV Studiosから生放送された

こうしたBBC Northの動きに合わせて、2007年にマンチェスターで自らのプロダクションNine Lives Mediaを設立したキャット・ルイス氏が今回のインタビューの相手である。ロンドンを拠点とした番組制作会社Unique Communications Groupのファクチュアル番組（ドキュメンタリー番組）部門の立ち上げと運営という経験を積み、満を持して独立した。この



Nine Lives Mediaのオフィス。平均30人が働く

地域で、ファクチュアル番組制作では最大のプロダクションである。

インタビュー

Nine Lives Mediaの由来

—まず、経営するNine Lives Mediaについてお聞きします。名前の由来から教えて頂けますか。

ルイス氏：名前の由来はいくつかありますよ。私のクリスチャンネームは“Catrina”というため、10代の頃からみんなが“Cat”と呼びました。猫には9つの命があるという言い伝えがあるでしょう。それが大きな理由です。そして、私の父は登山家で、私もとてもスポーツ好きです。岩登り、スキー、スキューバダイビング、乗馬など、これまで数回、死ぬような目にもありました。間違いなく、私にも9つの命があると思います。そして、3番目の理由は、テレビ業界の競争は激しく、非常にたくさんの創造性豊かな人たちが働いています。この業界で生き残るには、9つの命が必要だ、と思っているからです。

—マンチェスターで自分の会社を設立した理由は何でしょうか。

ルイス氏：私は、イングランドで“North”（以下、北部）と呼ばれるこの地域から離れたことはありません。ブリストル大学で英語とドラマを専攻し、実践的なテレビ制作を学びましたが、やはり、この北部が好きです。車に乗って2時間で5つの国立公園に行くことができます。大学はイングランドの南部でしたが、北部のセントラル・ランカシャー大学で放送ジャーナリズムのディプロマ（大学院に進む前のコース）をとり、BBCのノース・ウエスト局で研修生として最初の仕事を始めました。私は北部の人間で、ここにいることが好きだからですね。

—ルイスさんの会社の代表的な番組をあげてもらえますか。

ルイス氏：2012年に子ども向けドキュメンタリー“Me, My Dad and His Kidney”でBAFTA（British Academy of Film and Television Arts）の賞をもらいました。BBCの子ども向けチャンネルCBBCで全国放送された番組です。ラファエルという少年が主人公で、番組を通じてナレーションは少年が行いました。番組のスタート時点では少年は8歳でしたが、9歳を迎えた頃突然発病し、2つの腎臓がダメになり、自宅で人工透析を受けるようになりました。そして、少年の父は自分の腎臓を1つ息子に提供する決断をします。私たちは、日常生活から、発病、手術、快復のすべての過程を全体として丹念に時間をかけて、テンポよく、楽しく、視聴者を引きつけるように制作しました。私にも子どもがいますが、時折、子どもというものは、世界をすべてわかっているような方法で人を楽しませてくれます。手術が終わって、初めて父親と対面したときにラファエルは、「お



“Me, My Dad and His Kidney”
CBBCの“My Life”シリーズの1話

父さんの腎臓がレンガのように重くて、ペンギンのようなステップを踏む羽目になっちゃうよ」と言いましたが、私は、そのシーンがとても好きです。

—Nine Livesの得意な番組ジャンルは、こうしたドキュメンタリーですか。

ルイス氏：はい、主にファクチュアル番組（factual programme）です。ですが、ファクチュアル番組にはさまざまな形式があります。事実を基にしたドラマ、ドラマ・ドキュメンタリーなど幅が広い。私たちは、ファニー・ファクチュアル番組の制作が極めて上手いという評判を得ています。

—「ファニー・ファクチュアル」というカテゴリーは初めて耳にしましたが、どういうものでしょうか。

ルイス氏：一般人がドキュメンタリーの主役になります。そしてその人物は、自然な感じで機知に富み、面白い人物でなければなりません。イ

ギリスでは、娯楽番組は昔ほど高く評価されませんが、ファニー・ファクチュアル番組は非常に人気を博しています。このジャンルは、相対的に制作費は安く、言い換えれば、放送事業者にとって購入費が安くて、それでいて娯楽性が高く、多くの視聴者を引きつけることができます。



“Pound Shop Wars”

2012年11月にBBC Oneで1話ものとして放送。好評だったため2014年2月から4回シリーズで放送

わが社のシリーズでは、“Pound Shop Wars”（『ポンド・ショップ戦争』）という番組が2014年にBBC Oneで放送されました。イギリスの目抜き通りは今、劇的な変化を遂げています。すべての目抜き通りに現れるお店のタイプは、「ポンド・ショップ」（日本の100円ショップ）と呼ばれるもので、イギリスには三大ポンド・ショップチェーンがあります。どうやって、1ポンドの商品を作って、儲けるのか？そこらビジネス方法を学ぶのです。しかも、目抜き通りで商売をしているライバルたちを観察して、時間をかけて作ります。

ファニー・ファクチュアルは、番組のジャンルになり始めたと言ったほうがよいかもしれません。誰もが気づいていることと思いますが、人はみな笑うことが好きです。帰宅して、テレビをつけて、楽しませてもらいたいと思っています。

“Gogglebox”のような番組は、視聴者を楽しませる牽引役として、おかしな普通の人々を主役にしていきます。

“Gogglebox”

Channel 4で金曜日夜9時から放送の30分番組。2013年3月に4回シリーズで放送。その後、2015年2月から第5シリーズを放送。「gogglebox」とは、イギリスの口語でテレビのこと。全国各地の一般の4～5つの家族が自宅でソファに座り人気テレビ番組を見ながら、批評する様子をつづる。ゲイカップル、中流階級の年金生活者夫婦、移民の家族、自営業社長夫婦、ティーンエイジャーの姉弟など、イギリス社会を代表する家族が登場。国内で人気を博し、オーストラリア、カナダ、中国、ウクライナ、ポーランドなど世界でフォーマット販売されている。

私たちがまさに、それを狙っているのですが、“Gogglebox”との違いは、興味深いビジネス情報があり、面白い消費者情報があり、極めて複層的な情報を丁寧に提供しているところです。

真面目な問題を日常に持ち込むには、視聴者を番組に引き込む必要があります。理想的には、テレビ番組の中で視聴者を笑わせると同時に泣かせる、というように人間生活で経験するあらゆる感情を与えることです。

ドラマが一番簡単にそれを行うことができます。ストーリーを磨いて、素晴らしい出演者をそろえ、優秀なディレクターがいれば、視聴者を涙と笑いに導くことができます。ファクチュアル番組でそれを行うことはドラマよりも難しい。しかし、私がこの番組ジャンルで好きなことの1つは、事実の物語と実際の人々の大きな一体感です。子どもの頃から、私は事実を見たいし、そういうものを作りたい。そう思っています。

BBCの番組委託

—それでは、2番目の質問は番組制作委託についてです。放送事業者と番組制作会社はどういう関係を築いてきたのでしょうか。

ルイス氏: テレビという業界は本質的に非常に創造的なビジネスで、放送事業者としては、可能な限り多くの人々からベストな企画を得たいと思います。そうすれば、創造的な実力社会となります。私が放送事業者だったら、自分のチャンネルで放送する番組のためにたくさんの企画からベストなものを選びたいと思います。

今イギリスのテレビ業界は、プロジェクトに基づいて仕事をしています。原則的に我々は、フリーランスの番組制作者と仕事をします。プロジェクトが立ち上がったら、制作者を集め、なくなったら解散します。たとえば、私の会社が1週間前まで40人のスタッフを抱えていたとします。でもプロジェクトが終われば、元のコア・スタッフに戻ります。

自分の番組を制作している放送事業者にとって、そのように柔軟であることは難しい。正直なところ、BBCが局内で番組を制作していたら、おそらく私が雇っているような人をたく



さん雇用するだろうし、プロジェクトごとに人を雇用します。

BBCにとってでさえ、成功した外部のプロダクションやフリーランスの大きなコミュニティーがあれば、そこから必要とする人材を雇うので、年単位で雇用する必要もありません。1年単位で雇用され職員になると、彼らの創造性は弱まります。つまり、雇用にお金がかかり、創造性は失われるということです。

テレビにおける番組制作者の文化はとてもユニークです。フリーランスの立場を受け入れ、1つの会社で12週間働いたら、その後別の会社で4か月、さらに3か月働く、という働き方を受け入れています。日本とはずいぶん違うのではないのでしょうか。

本当に興味深いことは、イギリスでは、創造的な産業が経済の中で最も急速に成長している部門だということです。その結果、多くの雇用を創造し、若い人がやりたいと思うさまざまな仕事を作りました。

こうした産業と文化を生むには、政府による制度化が必要です。2003年放送通信法は、我々のような番組制作会社やフリーランスのプロデューサーが番組の著作権を所有し、作品を世界中で販売することができるようにしました。あるいは、作品を一部修正して世界に売ることができます。これは非常に重要なことです。私たちが著作権を持たず、作品を販売できないとしたら、成功することはできないからです。

—では、独立した番組制作者としての立場から、BBCとITVなど商業テレビとの間には、番組委託の基準に違いがあるのでしょうか。

ルイス氏: 質問の意図はわかりますが、公共放

送だからとか、商業放送だからとかで違いが出るというよりむしろ、個人の違いだと思います。

BBCの局内の番組制作者と番組委託に携わるコミッショナーは、非常に才能ある人たちです。創造性に富み、私は彼らと仕事をすることを楽しんでます。彼らは常に私たちにもっと優れた番組を作るようにプッシュし、もっと深掘りするように求めます。人生は短いのですから、一緒に働けば、もっと番組が良くなると思える人たちと働きたい。

個人に依存すると言いましたが、BBCには一種の文化が存在します。文字通り、商業チャンネルのように商業的ではなく、一部の商業チャンネルのように過度に人気を追い求めるということもありません。そして、BBCの人たちは、出演者や番組で描かれる人たちへの配慮がきめ細かい。また、番組制作上の法律問題やコンプライアンスに関して非常に高い基準を持っています。

でも、外から想像するほど、BBCとほかの放送事業者に大きな違いはありませんよ。また、番組制作費についても、とくに2010年以後BBCはかなり厳しい予算で運営されているので、必ずしもほかの放送事業者よりもずっと高いということもありません。

BBC North と地元のプロダクション

—BBC Northの地域へのインパクトはどうでしょうか。地元の番組制作者にとって良いことだったのでしょうか。

ルイス氏: 本当に良いことだと思います。BBC Northの意義については、その背景を理解するために、放送の歴史を少しさかのぼる必要



BBC Northのオフィス内部。約3,000人が働いている

があります。

60年前はBBCの1チャンネルしか存在しませんでした。政府は商業チャンネルを創設するにあたり、全国に地域テレビを持つようなフランチャイズシステムを導入することを決めました。その当時のBBCは、非常にロンドン中心的で、アッパーミドル的で、全体としてイギリスを反映していませんでした。こうした中で設立された商業テレビITVは、全国ネットワークを形成しましたが、番組はみな地域で制作されました。その意味では、60年前から全国のどこにいてもテレビの世界で働くことは可能だったと言えます。当時の政府としては、素晴らしく前向きで革新的なことをしたと思います。

ITVの地域免許

イギリスの商業テレビITV(正式名はChannel 3)の開始は1955年。ルイス氏の説明のように、開始当初は、法定機関のITAが全国放送免許を保有し、全国の16の地域に1社ずつ特定の番組制作会社を指定した。このITV各社が共同でロンドンにネットワークセンターを設け、各地で制作された番組を編成し、ITAが全国放送を行った。1990年代以後、所有規制の緩和が徐々に行われ、現在ではスコットランドSTV、北アイルランドUTV、イン

グラント/ウェールズITV plcの3社が免許を所有している。

この地域について言えば、「グラナダテレビジョン」が最も成功した事業者になりました。グラナダの創設者のシドニー・バーンスタインは、創造性にあふれた天才でした。創設者である前に、素晴らしいドキュメンタリストでした。彼が制作した番組の1つは、“Night Will Fall”という第2次世界大戦のホロコーストをテーマにした番組です。実は、その当時は放送されず、最近再編集して放送されました。

“Night Will Fall”

シドニー・バーンスタインは、ドイツ敗戦後、軍の戦場カメラマンがユダヤ人収容所の解放を撮影した記録映像を基にアルフレッド・ヒッチコックを監督に招き、“German Concentration Camps Factual Survey”を制作した。政府の決定で放送も上映もされなかったが、記録映像の一部はニュルンベルク裁判で証拠として採用された。ロンドンの王立戦争博物館が保管していたフィルムを基に2008年から復刻作業が始まり、2014年に完成。ベルリン国際映画祭で初上映されたほか、イギリスのチャンネル4やアメリカのCBSで放送された。

彼がこの地域を選んだ理由は、ほかの地域よりも雨が多いということです。つまり、テレビの視聴者は雨の日は家にいるものだと考えたからです。そして、グラナダは成功しました。

グラナダの優れたところは、ドキュメンタリーだけでなく多様な番組を制作する力があったことです。今も放送している労働者階級の連続ドラマ“Coronation Street”(1960年開始)は、グラナダの若き制作者トニー・ウォーレンが生み出した番組で、ものすごい人気を博しました。

おそらくITVネットワークセンターから数回のシリーズで制作委託されたものだと思いますが、その後、長寿番組となりました。グラナダはまた、“World in Action”(1963-1998)という非常に人気を集めた時事番組を生み出しました。1963年に放送を開始し、BBCが制作していたドキュメンタリー番組を完全に変わってしまいました。

あの時代は、非常に創造性に富んだわくわくした時代でした。全国にわたって、たくさんの人々がテレビ業界で働き、自分のアイデアをテレビに注ぐことができました。私がこれまで話してきた創造的な実力社会を獲得できたということです。

ところが、政府は1990年代以後、規制緩和政策をとり、成功したグラナダがほかのITV各社を買収することを許可しました。そしてグラナダはイングランドのITV各社をすべて買収し、ロンドンに移りました。この合併は、ITVが自分たちの望む方法でメディア企業としてグローバルに競争できることを意味しました。しかし一方で、どの地域にいてもテレビ業界で働くことはできなくなったことも意味しています。数多くの創造的な人々が、テレビへのアクセスを否定されました。

そうしたことが商業テレビ業界で起きていた時期に、BBCはロンドン中心だったために、問題に直面していました。受信許可料の90%がロンドンで費やされ、その結果BBCは、ロンドン以外の番組と言われるものを制作する必要に迫られました。受信許可料の妥当性を示すためです。第1に、受信許可料は、全国どこに住んでいても支払うもので、すべての仕事が行われることに疑問を持たれたからです。第2に、BBCの番組は、イングランド

北部の視聴者には全く人気がなかったからです。北部の視聴者はBBCについて、南部を本拠地とする組織であり、南部を反映していると受け止めていました。そこでBBCは、スコットランド、ウェールズ、そしてこのマンチェスターやブリストルに拠点を作りました。つまり、テレビのキャリアを積めるロンドン以外の第2の場所ができたのです。そして今、MediaCityUKとして復興しました。ITVの仕事がみなロンドンに行ってしまった現在、BBCの存在は非常に意義のあるものです。

—BBC Northは、あなたの会社にとってどんな利点がありますか。

ルイス氏：BAFTAの賞をとったような子ども向け番組はロンドンで制作されていて、BBCのコミッショナーとは何の接点もありませんでした。BBC Northができてこの地域にもコミッショナーがいるようになりました。先ほど、私が話したフリーランスの構造は、その地域で才能ある人材を維持しているかどうかにかかっています。キャリアを維持するためにロンドンに移らざるを得ない数多くの才能ある番組制作者がいます。BBCが地域で多くの人々を雇用するならば、そうした制作者が北部に根を下ろすために十分な仕事があると感じ、BBCも含めて複数の会社で事実上年間を通して働くことができます。

このことは、BBCにも良い方向に作用します。BBCも、1年を通じて人を雇わざるを得ない立場になりたいとは思わないでしょう。繰り返しになりますが、そういう状況では、創造性は減少し、お金はかかるようになります。ですから、BBCには、フリーランスの番組制作者をほか

の放送事業者と共有することができる健全な独立プロデューサーの業界が必要です。

BBC Studios

—ところで、BBCのトニー・ホール会長は昨年、BBCの番組制作部門の民営化計画を発表しました。これについて、どう思いますか。

下院文化メディアスポーツ常任委員会とBBC

委員会は2013年から2014年にかけて、「BBCの将来」について検討を行った。もちろん、特許状更新を意識したものである。委員会は、当事者であるBBCを含め放送関係者のヒアリングを行ったが、この委員会にパトリック・ヤングが2014年6月に意見書を提出し、同月24日に聴聞会に出席した。ヤングは2010年から2014年3月までBBCの番組制作局の幹部を務めていた。ヤングは、BBCの外部委託制作状況を分析したうえで、局内の制作集団を子会社化し、イギリス国内外の番組を制作できる自由を与えるべきだと提案した。

BBCのホール会長は翌7月に、ニュース・子ども向け・スポーツを除くテレビ番組制作部門約2,000人を本体から切り離し、子会社BBC Studios(仮)を設立すること、外部委託のクォータを撤廃し、BBC Studiosも民間の番組制作会社と競って、BBCおよび内外のテレビ事業者に向けて番組制作を受託する、という考えを公表した。

ルイス氏：私は個人的にこの考えを心の底から支持します。この考えを最初に示唆したのはパトリック・ヤングという人物で、昨年春までBBC制作局の幹部だったということが非常に興味深いですね。私は昨年の6月、議会下院の委員会に招かれ発言を求められ、この考えを支持しました。トニー・ホールがこれを採用してくれたのを知って、本当にうれしかった。

私は基本的に、BBCが制作部門を本体から

切り離し外に出すということがBBCを前進させるための唯一の論理的な方法だと考えています。BBCの将来を考えるのならば、2025年あるいは2026年を想定しなければなりません。

今現在、何が真実かと言えば、私のような独立した番組制作会社が非常に創造的な番組を制作しているということです。いくつも賞をとるような優れた番組を私たちが制作しています。

BBCは、非常に維持費の高いビルを持ち、各種の間接費もカバーしなければなりません。それに職員もたくさんいる。番組制作者も受信許可料支払い者も、自分の受信許可料が可能な限り良い番組に注がれなければならないと思っています。BBCはもっと平板な組織構造であるべきで、しばしばお金を無駄にするようなグレーな領域を取り除かなくてはならない、と思います。つまり、BBCは商業ビジネスのように、どこが成功するのか、失敗するのかを分析し、経営にあたるべきです。そして、BBCは番組を制作し続けるべきだと強く思います。彼らは優秀ですし、大いに尊敬もしています。私は、彼らも内部以外に向けて番組を制作する自由が必要だと思います。今、存在しているBBCのチャンネルだけにしかアイデアを出すことができないというのは、奇妙な状況だと思います。

—これは、急進的な変化だと思いますが。

ルイス氏:非常に急進的ですが、BBCが将来その能力を最大に活かして運営できる唯一の方法です。私は純粋にそう思っています。

BBCが創設された100年前のアート・ギャラリーに置き換えて考えてみましょう。当時はやらねばならないことをやるために、自前の芸術家を雇いました。しかし、何年たっても、自分の

お抱えの芸術家がたくさんいたとしたら、どうかしています。今のようなどこにでも芸術家はいて、どこにでもギャラリーがあるという時代に、自分のギャラリーに展示するためだけに、自前の芸術家を抱える必要はありません。

これは、BBCが古ぼけた存在にならないようにするための将来に向けた繊細な戦略だと思います。BBCは偉大な組織であり、英国に存在する素晴らしいものの1つです。私たちは、BBCの将来を確実に守りたいと思っています。

—プロダクションを外に出すことを評価しているということですが、それに伴うリスクがあるとしたら、何だと思いますか。

ルイス氏:この提案の詳細はまだ公表されていません。トニー・ホールは、子ども向け番組の制作は内部に残すと言っています。このジャンルはあまり商業的ではないからです。ですから、局内に制作を残すことで、子ども向け番組やスポーツを守ってほしいと思います。幸いなことにそうした部局の多くがマンチェスターにあります。

私たちが望んでいることは、受信許可料がBBCの外部で生き残る力がないような人々を支援することに使われないようにすることです。それこそ、今回のBBC Studiosが描いていることだと思いたい。

BBC Three の廃止

—もう1つ、BBCは重要な計画を明らかにしています。若者向けのBBC Threeをテレビ・チャンネルとして廃止するようですが、このことについては賛成ですか。

BBC Threeの廃止案

BBCのホール会長は2014年3月6日、若者向けテレビ・チャンネルBBC Threeをテレビ・チャンネルとしては廃止する計画を発表した。これが実現されれば、BBCにとっては歴史上初めて、既存テレビ・チャンネルの廃止となり、サービスの削減となる。政府が支出していた国際放送の経費約500億円を2014年度から受信許可料から出すなど、BBCは経費圧縮を迫られている。BBCは、各部門の予算の均等削減では対処不可能と考え、若い視聴者の中でオンライン利用の拡大と放送離れが今後進むという予測を基に、BBC Threeを廃止し、オンラインサービスへ移行する、とした。この廃止により年間5,000万ポンドの経費削減となる。BBC執行部は、同年12月、監督機関のBBCトラストに対し、BBC Threeの廃止・オンラインサービス化、空いた周波数帯を利用したお勧め番組を集めた再放送チャンネルBBC One+1の開始などの新提案を正式に提出した。BBCトラストは、これに関し「公共的価値の審査」を開始した。

ルイス氏: 最悪なことだと思います。私がテレビ業界で働いている限り、この計画は最悪で最も悲しいことの1つです。

—なぜ、そう思うのでしょうか。

ルイス氏: BBC Threeは、16歳から34歳までの人たちの間で最も人気のあるチャンネルの1つです。ですから、BBCの視聴者リーチは、BBC Threeのおかげで広がったと言えます。これをオンラインに移行して上手く行ってほしいと願ってはいますが、そうならない確率のほうが高いと思います。この国の若者は、どこにいてもオンラインにアクセスできるわけではないからです。もし、オンラインに移行すれば、若者の20%は、ブロードバンドを利用できず、BBC

Threeを見ることができません。

また、多くの人たちにとって、テレビでそのキャリアを開始することが極めて重要なことです。新しいシリーズ・プロデューサー、出演する新しいタレントやコメディアン、新しいドラマの脚本家など、たくさんの人がBBC Threeでブレイクし、ほかのチャンネルで優れた番組を制作するようになりました。私たちは、企業としてBBC Three向けに番組を制作し始め、今では、BBC One向けに番組を制作しています。私たちには、直ちにメインチャンネルのBBC Oneに番組を制作するチャンスはなかったと思います。そのためには、実力を証明しなければならなかったからです。

そして、問題は、この計画が政治的であるということです。長い間、右派の政治家の一部は、BBCに不平を言ってきました。彼らはとにかく、BBCを嫌っています。BBCが行うことは何でも嫌いです。BBCがイギリスにもたらしている利益を顧みず、BBCが何をしようと意見を和らげません。彼らは、BBCに賛成せず、ストップをかけようとします。BBC Threeがばかばかしい番組タイトルをつけると、ぶつぶつ文句を言います。まるで、注意を引きつけたくて、泣き叫んでいる赤ん坊のようです。

基本的に今やBBC Threeはチャンネルとして成熟しています。このチャンネルにBBCは受信許可料をこれまで10億ポンド投資しています。そして、ほかのチャンネルよりも多くの賞を勝ち取るような地位にまでブランドを引き上げました。BBC Threeの番組は高く評価され、何度も年間最優秀のデジタル・チャンネル賞をとりました。

それを今、壊そうとしています。将来の中心的な視聴者とのコミュニケーションを断つ会社

なんて、あるのでしょうか。この地球上で、若い人たちにリーチしたくない理由などあるのでしょうか。

しかし、この事態に、自分に何ができるのかわからず、みな無力感を抱いています。私は、自分の意見をBBCに送りましたし、さまざまな場所で意見を述べています。しかし、BBCは聞く耳を持ちません。関心さえ持たない。単に右寄りの政治家たちにアピールするために、このサービスを廃止すると、政治的な理由で決定しました。みんなそう感じています。

—この意見は、ルイスさんだけでないということですか。

ルイス氏：そうです。昨日の夜も番組制作者の会合がありましたが、みんな本当に怒っていますし、動揺しています。

—私は、BBC Three のテレビからオンラインへの移行という選択は論理的なものだと考えていました。若い人は高齢者よりもインターネットを利用し、デジタル機器に慣れているからです。

ルイス氏：この計画の何が急進的かという点、まだ世界中でテレビ・チャンネルをオンラインから始めて成功している企業も放送事業者もいないということです。オンライン・チャンネルは、自分をサポートしてくれるテレビ・チャンネルを求めています。純粋にオンラインを通じて道を切り開くことは、とても難しいのです。BBCは、人々をオンラインに向かわせ、オンラインを見るように背中を押そうと、大きな実験をしています。

しかし、私たちにとって問題なのは、BBCが

外部の番組制作者との関係を持ってないということです。BBCは、オンラインのコンテンツについては私たちに権利を与えていません。BBCは今、オンライン番組に関する権利を激しく変化させています。そうした契約をBBCと交渉することは不可能です。予算は急速に縮小し、チャンネル全体にわたって道理にかなっていないような方法で、予算を削減しています。ですから、このことを単純にオンラインへの移行だとみることには間違っています。オンラインへの移行というよりも、この廃止の持つ意味は大きい。業界としては、そう考えています。

—ありがとうございました。

おわりに

このインタビューは2015年3月27日（金）午前9時から、Nine Lives Mediaのオフィスで行われた。表情豊かに快活に話すルイス氏からは、番組制作会社の経営者というより、1人の番組制作者としての番組作りへの熱意を感じさせられた。また、テレビ番組をロンドン以外の地域で制作する意義について、商業テレビITVの誕生にさかのぼり、グラナダテレビジョンの功績について語ったことは興味深い。BBCが、ロンドンに次ぐ第2の放送センターと位置づけるBBC Northを建設した背景には、イギリスの民間番組制作の歴史と伝統に貢献したグラナダの存在があったことに、改めて気づかされた。

今回のイギリス取材では、BBC、Pact、大学関係者、元BBCトラスト会長などインタビューの相手に対し、共通の2つの質問を行った。2014年にBBC会長が公表した改革のポイント

である「内部制作部門の民営化/BBC Studiosの設立」と「BBC Threeの廃止/オンライン化」の2つである。

BBC Studiosの設立について、ルイス氏を含めインタビューした相手がすべて賛成の意見を述べたが、ルイス氏のように、BBC Studiosと直接ライバル関係になる立場からも計画を支持していることを驚きをもって受け止めた。ルイス氏は、テレビ番組制作は創造的な実力社会であると定義し、そこにBBCの内部の番組制作者も参加し、内部では否定されてしまうかもしれない独自のアイデアや企画をBBC以外の放送事業者にも提案し実現する自由を得るべきだ、と考えている。もちろんルイス氏が経営者として、そして受信許可料支払ひ者の1人として、受信許可料を有効に活用すべきだという主張も一方ではある。BBC Studiosについては、BBCの監督機関であるBBCトラストが2015年6月に執行部からの詳細な提案を待つと述べ、総論賛成という方針を明らかにしている。

一方、若者向けテレビ・チャンネルのBBC Threeの廃止については、強く反対の意見を述べた。ルイス氏が言うように、BBC Threeは、制作関係者にとってBBCへの登竜門のような役割を果たした。たとえば、スケッチ・コメディ番組の“Little Britain”は、2003年に、当時売れないコメディアン2人のマット・ルーカスとデビッド・ウォリアムスを主演とし、BBC Threeで放送され、人気を博しBBC Oneに格上げされてシリーズ放送された。デビッド・ウォリアムスは現在、ITVの人気番組“Britain's Got Talent”（スター誕生）の審査員も務めている。ルイス氏の立場からは、BBCへのアクセスと収入を失うことに加え、オンライン向けコンテンツ制作に関してBBCとの制作委託の取り

決めが不透明であることも不安要素である。しかし、ルイス氏を含む業界関係者の要望に反し、BBCトラストは6月下旬、若い視聴者層へのリーチを確保するための工夫を凝らすことを条件に、テレビチャンネルとしてのBBC Threeの廃止を決定した。

イギリスの議会では、7月の閉会を前に政府歳出見直し案に関連した緊急議論が連日行われた。BBCの受信許可料もその対象となり、政府は国費負担だった75歳以上の受信許可料全額免除分を受信許可料で賄うことを明らかにした。この負担額は年額6億ポンド（約1,130億円）余りとなり、BBCの受信許可料収入の16.5%に相当する。一方、BBC負担の増大に対し、受信許可料のインフレ連動値上げを検討するといった取り決めがBBCと政府の間で締結された。BBCが2014年以後に公表した「制作部門の民営化」「BBC Threeの廃止」の2つの計画は、事業収入大幅減を見越した備えであるにとらえるのなら、極めて政治的な対応とみても不思議ではない。

この受信許可料の取り決めにつき、政府は7月16日、BBCの特許状見直しに関するグリーンペーパーを発表し、議論を正式に開始した。この議論に影響を与えられられるイギリスのテレビ番組制作の現状について、今後、本誌で報告する予定である。

（なかむら よしこ）